

約束を守らない人は信用できない。ウソをつく人はなおさらだ。

わたしたちの隣人は、約束を守らず、平気でウソを垂れ流す、という現実を厳しく受け止め、最大限の用心をして交際する必要がある。

2017年の韓国映画「軍艦島」は、日本統治時代、炭坑等で強制労働させられ、残虐非道な扱いを受けたとされる、いわゆる「徴用工問題」をインスパイアするプロパガンダ映画である。

また、2016年の「ラストプリンセス」大韓帝国最後の皇女」は、実在の王族の非業の半生を通して、侵略国家「日本」の卑劣で、情け容赦ない仕打ちをオーバーに描いた大作だ。「一部フィクション(ウソ)」と断りながら、実在の地名や人名、時代背景もそのままであり、あえて、見た人が事実そのものだという印象を抱くように編集している。

最大のテーマは、日本人がいかに卑劣で残虐非道な人種であるかを啓発することであり、見ている人を高揚させ、感情を揺さぶるエピソードや事件、つまり、映画の大事な要素はウソで構成しながら、最後にはあたかも史実に基づいた映画だと錯覚してしまうような、卑劣な制作手法がとられている。

日本人の卑劣さや残虐性を表現するシーン、そして、非道な暴力によって抑圧された韓国人の誠実さや勇敢さを表現するシーンは、こぞウソなのだ。

大袈裟な表現どころか、架空の事件やエピソードが捏造され、しかも、目立たない

## 『フェイクムービー ～歴史の捏造～』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

ように白しているところが厚かましい。さて、当時の日本人は、ほんとうに残虐非道な民族だったのか？

日本に対して圧倒的な復讐心をもって米軍を指揮した、かのマッカーサー元帥の日本人評は、なんとそれとは真逆に等しいものだった。

武士道を始めとする特有の精神文化、規律のとれた習慣、周りを思う道徳心など、とても残虐非道とは縁遠い評価がされている。

だからこそ、国家として脅威であり、二度と米国に反抗しないよう、占領統治、教育により、骨抜きにする必要があったということだ。

帝国主義時代、世界を挙げた侵略戦争は、多くの悲惨な出来事を生んだが、その中で、殊更に日本人だけが残虐非道な戦術や所業を犯した事実はない。

当時も含め、戦後、今現在、日本人ほど、秩序や規律を重んじ、約束を大事にしてきた民族はいるだろうか？ 国民性というものは、戦争(敗戦)を挟んで、そう簡単に変わるものではなく、よもや米国の民主教育によって、民族再生を果たしたわけでもない。隣人たちは、日本人を悪人たらしめることこそ、最も有効な外交戦術であり、ミサイルをも凌駕することを熟知している。

歴史の捏造は、コストパフォーマンスがヤバイ！のだ。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中